

や方法、関心の主題も様々である。また、二十世紀初頭に日本を含め欧米諸国が探検隊を送りこんだ場所でもあり、出土遺物のコレクションは世界中に収蔵されている。

私は二〇〇七年から一年半ほど中国に留学し、語学の習得と研究者との交流、さらに現地での資料調査に明け暮れていた。初期鉄器をめぐる交流が研究テーマであり、青銅器時代から初期鉄器時代の武器や工具を中心に各地の博物館や考古研究所でたくさん資料を見せていただいた。しかし、見れば見るほど、調べれば調べるほど、草原世界への興味は尽きない。そして中国との関連のある資料は、中国の外にある場合も多い。言語はまだまだ習得途中のものが多々あり、論文を読むのに非常に時間がかかったりもする。海外がフィールドなので渡航費など必要であり、学部時代はアルバイト三昧だったりした。困難な部分も多いがそれでも、研究を続け、何度も遺跡を訪れたいと思うモチベーションは全く落ちる気配がない。

歴史を研究する目的は様々であろう。私の場合、草原世界を訪れ、出土した遺物を見ることにより、その土地に惹かれ、その文化に魅せられ「なぜ」と「もっと広く、深く知りたい」と思うようになった。モノに基づき、モノから歴史を考えるとという考古学の方法論も私自身の興味を引き出すのに合致していたともいえる。しかし、単純で明快な興味が続いているのは、ユーラシア草原世界が備える人々のダイナミックな交流の歴史であり、その東端に位置する日本もまた、間接的ではあるにせよ、その渦の一部であったという認識からであるといえる。

## 〈第二回〉

### 早稲田で歴史を学ぶこと

真辺 将之

もともと政治経済学部で経済学を専攻していた私が歴史学を学ぶきっかけになった

のは、鹿野政直先生の『鳥島は入っているか』との出会いであった。経済学にそれなりの面白さを感じながらも、そこに何か腑に落ちないものを感じていた私にとって、どんな小さな存在でもそれを無視したくないというこの本のメッセージは衝撃であった。全体的効率性を重んじる経済学という学問にある種の「冷たさ」を感じていた私は、そこから鹿野先生の本を貪り読むようになり、そこからしだいに歴史学の世界へと引き込まれていった。

社会科学は全般に全体を支配する法則Ⅱ理論を重んじる。とりわけ経済学は全体の効率をいかにして高めるかということを重視する。その結果、極論すれば、九九九人が幸せになるならば、一人が犠牲になってもやむをえないと言わなければならない。鹿野先生の研究は、その犠牲にされる「二人」の立場に徹底してこだわっているように私には感じられた。当時は明確に意識していたわけではないけれども、のちに大学院に

入り「反欧化主義」という研究テーマを選ぶことになったのも、西洋をモデルとする近代化の流れに反対した人々に、経済学という学問への違和感を感じた自分を重ね合わせたからではないかと、今になってみるとそう思えるのである。

社会科学が理論Ⅱ全体性を重んじるのに対し、人文科学というのは、一人一人の人間や一つ一つの個別的な事実が出発点である。もちろん人文科学とて全体性を無視するわけではない。しかしその全体性の重視の仕方は、個別性を捨象してしまうのではなく、むしろ逆に、その個別の事実や人間が、全体の中にどのように位置づけられるのか、あるいは、その事実や人間を通して、全体がどのように見えてくるのかを問うという形でなされる。例えば、一般的には一八九〇年という年は、議会が開設され日本の国民に初めて参政権が付与された年である。ところが、もし女性の視点から見るとらば、同じこの一八九〇年は、「集会及政治法」が出されて女性の政治集会への参加

が禁止された年、すなわち女性から参政権が奪われた年として見ることも可能となる。このように、その出発点となる事実や人間によって歴史的な全体像の見え方は異なってくる。そしてこのように多様な視座・価値観から見ることが出来る学問であるからこそ、それを解釈する歴史家の位置が大きな意味を持つてくるし、そこに危うさも存在する。

人文科学のなかでも、歴史学は、その「総合性」において際立っている。政治も経済も文学も思想も過去のもものは総て歴史学の対象となりうる。古代ローマの賢人風に言えば「人間に関わることはすべて歴史学と無関係とは思われない」ということになる。したがって、歴史学を極めようとする者は、人間を極めなくてはならない。人間的な奥行きの深さがどれだけあるか、それが問われるのである。研究者を目指すごく一部のの人々を除いては、大学で学ぶ学問というのは決して社会に出て直接に役立つ学問ではない。だからこそ学ぶ内容その

ものよりも「いかに学ぶか」という過程が大切になってくる。学問を通じて考える力を養うことが重要なのである。歴史学の持つ総合性は、その思考訓練の場として非常に適切であると私は考える。歴史に関する本を貪り読むことによって、様々なトピックスを題材に、現在とはまるで異なる価値観や人間の多彩なあり方を知るとともに、また時代によって変化しない人間の本质をも知ることができる。もちろん本を読むだけでは身に付かないこともある。そのためには、実生活において、多くの人々と接することによって、多様なものの見方を身に着けることが必要になる。自分とは異なる多様な価値観を持つ人々と交わることによって、いろんな価値観を包摂できる思考力を身につければ、そのこと自体が、歴史を多様な視点から見つめる力を養うことにもつながってくる。E・H・カーは、「歴史とは過去と現在との絶えざる対話である」と言っているが、そのようにして歴史と現実とを往復させていくことが大事なのである。

早稲田大学という場所は、こうした学びに最も最適な場所である。なぜなら早稲田

大学は「自由と多様性」において特徴づけられる大学であるからだ。大学は何も学生に干渉しない。私が経済学のゼミに所属していたながら、卒業論文を思想史で書きたいというわがままが認められたのも、早稲田ならではのことだったと思う。早稲田のほとんどの教師は、学生が主体的に抱いた研究テーマを変更せよなどということは言わない。しかし、自由で干渉がないということとは、一歩間違えば墮落と停滞にもつながる。多様性というのもまたクセモノで、なまじっか多様な人間がいるだけに、狭い世界にこもっていてもそれなりに居場所が出来てしまう。でもそれでは意味が無い。むしろ自分と違う人間と交わり、いろんな価値観に接してこそ、早稲田の持つ特質を活用しえたといえるだろう。いろんな人間がいるからこそ、自分と違う人間と接してほしい。マンモス大学だからこそ、自分とは違う変な人・すごい人が必ずどこかにい

る。そういう学友や教員をどこかで見つけて、徹底的に影響を受けて欲しい。

「何でもあり」の歴史学だからこそ、「何でもあり」の早稲田との親和性も高い。この「何でもあり」の早稲田と歴史学とを相互にリンクさせながら有効に活用して、人間的な奥行きを深さを見につけてほしい。言うは易く行なうは難し。かくいう私も、未だ修業の途上、人間的な奥行きを得ようと模索しつつ、失敗と挫折との連続であるのだが…。

## 中国史研究の空白領域に挑戦する

飯山 知保

現在の中華人民共和国には五六の法定民族集団が存在するが、これはあくまで最大公約数的な分類であり、実際には四〇〇以上の民族集団が存在するといわれる。この、世界でも有数の多民族国家を統治するため、中国共産党は「中国人」とは何か、それを

どのように定義すべきかという問題を常に追及してきた。この過程で重要な役割を果たしたのが、社会学者・文化人類学者・民俗学者の費孝通（一九一〇—二〇〇五）であった。中華人民共和国の建国後に行われた「民族識別工作」の主要メンバーでもあった費孝通は、その終了後も中国史上にいか

に諸民族を位置づけるかという作業を継続し、「中華民族」という概念の理論化を行った。すなわち、「歴史上、多くの文化・民族が融合して「中華民族」が誕生した」という「多元一体構造」論である。しかし、この論には重大な空白がある。漢民族が主に居住する地域（China proper）の北半（華北）では、その気候条件や多くの戦乱のため、文献史料があまり残存しておらず、南半にくらべてわからないことが多すぎる。とくに一〇〜一五世紀、すなわち、「民族融合」が発生したとされるまさにその時期の状況は、実はほとんどわかっていない。

こうした中、一九九〇年代以降、中国で